

部落問題文芸作品選集

第27卷

坂市 巖著
育ち行く雑草(上)

世界文庫版

部落問題文芸作品選集 第二七卷

定価は箱帯に表示

昭和五十一年一月八日発行

発行者

松本富夫

発行所

株式会社 世界文庫

東京都目黒区洗足二一二―一五

電話 〇三(七一六) 六一五一(代表)
(七一三) 九二四四

振替 東京 七八四九八番 一五二

落丁、乱丁本はお取替えいたします。

未解放部落西浜

この小説を未解放部落の
完全解放のかがやかしい偉業をなしとげるであろう
日本の労働者階級にささげる。

坂市

西浜と一口に云つても戸数約一万戸以上もある日本一の大部落である。西浜の産業は皮靴の製造と、主に靴が生産されていた。生産された靴は、北は北海道から、南は九州迄と全国へ送られていた。

西浜のほとんどの人達は製靴職人であった。外に、野球のグローブ兼手袋業、肉業、靴修理業、下駄直し業などがあつた。それらを基礎に、僅かな原皮問屋、靴製造問屋（親方）靴原料問屋があつた。

施設として、栄第一、栄第二尋常小学校、有隣勤労尋常小学校、栄家政高等女学校、栄幼稚園、栄市民館、栄公設市場などがあつた。そして、彼等の精神的支柱、阿弥陀寺、正宣寺、徳浄寺、と、堂々たる立派な寺があつた。

こうした封建制の遺物として取り残された、日本の縮図部落西浜が存在していた。だが西浜にも、昨日も今日も明日もと、喜び悲しみ苦しみの人間の生活があつた。

第一部

昭和十三年二月三日。

朝から底冷えがして、どんより曇った灰色の空から、夕暮れになると雪が降り出した。大阪市浪速区栄町四丁目巡査派出所から、ハンチングに中折帽子を真深く被り、外とう、オーバーの襟を立てた私服らしき四人連れの男が出て来た。

「じゃ、一人も逃がさぬよう頼みますぞ。」背がずばぬけて高く、肩幅の広い頬骨の出張った男が、言った。被っている黒い中折帽子は、頭がでかいのか帽子が小さいのか、深く被った縁は波打っていた。

彼らは、派出所の前で左右に別れた。声をかけた大男と、ハンチングに眼鏡をかけた二人は、表通りに出て東へ向った。西浜の人達はこの道を下道と呼んでいた。商店街で、原皮問屋、靴製造問屋、靴原料問屋と、皮靴にかんする商品を販売する店が両向いにずらりと並び、今宮の踏切り近く迄つづいていた。

この頃、昭和十二年七月七日、北京郊外芦溝橋における日中兩國の軍隊の衝突によって日華事変となり事変による日本の経済は悪化に向っていた。皮靴産業の西浜も深刻な打撃を受けつつあった。生命である原皮は軍部に徴収され、皮靴の

使用も制限されていた。そのため、下道も事変前の活況がなく、まったくさびれていた。

二人の私服は、お多福屋駄菓子店と、いづせんや煙草店の間を右は曲って向って行く。やがて出入り賑う地藏湯の前に立ちとまって、向い側をぐっと覗む。

「清水君、この長屋だ。」大男が言う。

「ふむ。」

そして二人は、曾我理髪店と、松井靴原料店の横丁の、八五長屋へ吸い込まれていった。

八五長屋は夕飯時で何処の家も賑っていた。二人は、正一位国高稲荷大明神の前でなにか打合せをはじめた。下駄直し屋の小太郎が、彼らをちらりと見て、着物の前をあげ共同便所へ入って行く。そこへ破れた番傘を片手に風呂行きの道具を小脇に、母娘らしい二人連れが、見馴れぬ男を横目で眺めながら通って行く。子供の頭には、母の手製らしき桃割れが結ばれていた。小股でチョコチョコ歩くたびに銀のカンザシがチラチラふるえる。子供は、二人の男を氣にして母に遅れたのに気づき、母に追いつくと、袂を引張った。

「お母ちゃん、お母ちゃん。」

「なにや、うるさい子やな。」

「お母ちゃん、いまのおっさん、けったいやで、うっとこの家の中のぞいて、はて、一人のおっさん春一さんの家に入ってた。」

母は振り向くと、一軒々々覗くようにして西へ向つていく大男を、怪訝そうに見つめた。

「あのら一体なにやる？」

さつと、共同工場方面から吹きつけてくる風で雪がからんだ。

「これ、こんなところで立っていたら風邪ひく。早よ風呂へ行こう。」

母娘はくるりと振り向く。

「お母ちゃん。風呂に入っても、うちの頭洗ったらあかんで。」

一ハ、ハ。洗わへん。洗わへん。」

そして母娘は、楽しく喋りながら、地蔵湯ののれんをかき分けて入って行く。

一度地蔵堂の前を通りすぎた大男は、すぐ引き返すと、東隣りの庇の傾いた平家の前で立ち止った。ポケットから懐中電燈を取り出すと、覗き込むようにして表札を照らす。「森田八兵衛」と、薄汚れた表札が浮び上った。うなづいた彼は、懐中電燈をポケットに入れ、両肩の雪を払い落す。そして、レールのない重いガラス障子をガゴト開けた。ぱつと暖風が横切る。

「今晚は、森田進さんの家、お宅ですか？」と、言つて、彼は帽子も取らず、鋭い眼で家中を眺め回す。

表三疊の間で夕飯の仕度くをしていた父らしいのが、突然

見知らぬ大男が現われたので、狼狽した様子であつた。

「おたくー、どなたー、だんねー。」中風らしく、重いふるえ声に、語尾を引張つて訊く。

「僕は、進君と親しくしている者です。逢つて話したいことがあるんです。」居留守を使われるおそれがあるので、警察と名乗らず用心した彼は、奥の仕事場の方に鋭い視線を投げた。

庭から丸見えの奥の仕事場に、兄と妹らしいのが、仕事台を挟んで働いていた。甲皮を叩く金槌の音が機関銃のようにひびいていた。進のことで、父と話し合っている大男に気づいた兄は、振り向くと、鼻歌まじりでミシンを踏む弟になにかさやいた。鼻歌とステップがびたりとやんで、ミシンの首の横から、額の広い少し奥目の気の弱そうな顔が覗かれた。

「おつ父^たん、だれや？。いま手はなされへんし、お家^{いえ}に上つてももうてんか。」

「ちよつとこちらまで来てくれますか。話はすぐすみます。」おうむ返しに、突き刺すようにとはつていく。

進はミシン場で、うさくさうに、ズボンにへばりつく糸屑をパンパンと払い落し、見知らぬ男で首を傾けのこのこ出て来た。兄と妹が手を休め心配げに見送つた。

「君が進君かね。」

「そうです……。」

「僕は、芦原警察の防犯係の日賀ですが、本署まで同行してくるかね。いや、心配せんでよい。訳が分ればすぐ帰す。」と、云って、さし出した黒皮の手帳でかばうようにして、軽い咳払いをする。

ほんと、突立っている進の頬に血の気がひいていくのが見られた。もう小さきみにふるえていた。呆然とした父は、舌がもつれて喋れないのか、口をもぐもぐさせていた。びっくりした兄は、職場から飛んで来た。

「進が、なにか悪いことでも？……。」上ずった声で、手帳のひかえを調べる。日賀に訊く。

「事情は、ここでは話せん。早く用意をしろ……。」警察を名乗ってからの日賀は、横柄になっていた。

「ご飯まだですが……。」兄が云う、

「ご飯は食べてもよい。え、向いは吉崎鶴松の家かね。」

「そうです。」

「向いまで行ってくるから、それまで用意をしろ。逃げたらあかんぞ。……分ったな。」

日賀は強く念を押して、手帳をポケットに入れると、向いの平家を見つめながら、びしょ濡れの溝板を踏みしめ、びしやりと障子を閉めた。

楽しく原歌まじりで働いていた彼らの家庭に、突然日賀の来訪でたちまち掻き消され、重苦しい憂色に変った妹の知らせで同じ長屋で住む姉の君江と、主人の桑三が駆けつけて来

た。桑三は、日賀が向いに入ったと聞くと、現在使っている弟子の家でもあったので、向いへ飛んで行く。

「進、新世界で喧嘩でもしたのところがうか？」

上り口に腰かける君江が、訊く。

進の答えは、いま迄自分の方から喧嘩を売りつけたこともなかったし、相手から売りつけられた覚えもなかった。それに、最近夜業がつづいて何処にも遊びに行っていないのだ。なぜ警察に連れていかれるのか、さっぱり訳が分らなかつた。まったく雲をつかむようであつた。近所で遊んで帰って来た二人の妹は、カチカチと、白い歯を鳴らしている兄の顔を、茶碗越しに見つめていた。表では、慌だだししく駆けて行く二三の足音がしていた。

はだ着を取りかえ温くして、黒地の水玉模様のマフラーを細い頸に巻く。敷居の釘にかけてあるオーバーを着て、姉と兄につきそわれて外に出る。

雪は、牡丹雪になって静かに降りそそいでいた。庇に邪魔された雪は床几の端で行儀よく並んでいた。横に並んだ物干し竿に白線が美しくひかれていた。並びの悪い屋根瓦は、銀色にかがやき、地藏堂の丸い電燈がぼんやり浮かんでいた。

彼らが入口で立っていると、東の方から兄の友達の辰吉が、つんのめるようにして駆けて来た。

「進、われもか？。いま春一と昭磨が防犯に連れ出されたのや。ほて、おれとこの八男にも来てるそうやね。一体なんの

事件や一相当慌て込んでいるらしくいつ氣に課った。

「辰吉、わしらもなんの事件が知らんのや。」

兄が前に乗り出して云う。

「そうか、おれ八男氣になるし、帰ってくる。」と、云つて、西に向つて駆け出した。

すると、向いの家から先頭の目賀の後に、頭髮を七三にきちつと分けた英一が、オーバーの襟を立て伏眼で出て来た。つづいて、真赤な顔をした父の鶴松が「ド阿呆めが」と罵しりながら出てくる。その後に桑三がつづいていた。

西の方も騒がしくなつて、真苔に首垂れた、八男、務、秋春、春雄達が、防犯に連れられゴロゴロやつて来た。どんなささいな事でも電波のように長屋に伝わるので、あちこちから蜂のように人々が集つて来て、大騒ぎとなつた。

八五長屋は、浪速区栄町四丁目四十四番地であつた。元木津北島町八十五番地の八十五を使って、西浜部落内では八五長屋で通つていた。向い合せの棟間長屋で、裏手にも片側つづきの長屋が並んでいた。戸数は、二階建を交じえ六十戸程あつて、男女子供を合せ三百人は住んでいるかと思われ密集した裏長屋であつた。屋根のない共同水道三ヶ所と、トイレもなく雨漏りのする共同便所が三ヶ所あつた。そして、薄汚れた駄菓子屋が二軒あつた。

防犯の清水に連れられた、春一、昭齋達がゴロゴロやつて来ると、騒ぎは一段と大きくなつた。そこへ、(われら一休

なにをしたのや」と、地藏堂の横の路地から大声を出しながら、下駄直し屋の国松が、人を掻き分け凄じい勢いで前に出て来た。

国松は、若い頃は手のつけられぬ暴れん坊であつた。年老いて長屋の世話をするようになり、長屋にどんな問題が起つても、彼が乗り出し、たとえ話も交じえて上手に解決した。しかし、こんな人にありがたな、一つ間違えば雷のように怒鳴つたので、雷の国やんで通つていた。今晚も雪見酒で女房と一杯引つけているところへ、近所の人の知らせで飛び出して来たのであつた。「旦那、こゝ若い衆警察に連れていかれるような、なんぞ悪いことでもしましたのか？」と、酒の酔いもあつて、左肩をやや突き出すようにして言つた。

「貴様、だれかッ」清水が、眼鏡をきらめかして切り込んだ。「旦那、わしは、この長屋の世話方をしている、阪本国松という者だす」

目賀が一步前に乗り出した。

「君、世話方の阪本と言つたね。とにかく皆を連れていく。訳はこゝで話せんから、明日本署まで来てくれ」

返辞は、彼らの常套手段の本署迄であつた。この伝家の宝刀の前には、さすが向う意気の強い国松も、握りこぶしをふるわせるのであつた。

振り向いた目賀は、ポケットから手錠を取り出した。防犯達もポケットをガチャつかせる。それをす早くとらえた国松

は、蒼くなってゐる英一の右手首をつかんだ日賀に、言った。

「旦那、手錠はめまんのか……」

「はめる、逃亡されたらこまるからな」と、冷たく言つて、カチンと叩く。

手錠は、ギーと、歯切れのよい音を立て、こうを画いてカチンとはまった。そして、進の左手首を握つた時、国松がそれを遮ぎるようにして、言つた。

「旦那、ちょ、ちよつと待つておくなはれ。どんな事件か知りまへんが、わしが責任を持ちまっから手錠だけこらえてやつてくれへんしまへんか……」

と、言つて国松は、首垂れて手錠をカチカチとはめられていく彼らに向つて、長屋一杯にひびき渡る大声を張り上げた。

「われらも分つたなッ、途中で逃げ出すそんな卑怯な真似だけはするな……」

昭鷹に手錠がはめられた時、母の小そのが、そんなえげつないことをしてやつてくれんでも、昭鷹の奴は逃げも隠れもしやへんと嘆いていた。春一に手錠がかかると母の政江が、「春一たん」と、思わず口走つていた。自分の家族では口先の強い鶴松が、国松の顔色ばかり見ておどおどしていた。長屋の人達もさわめいて、めいめいの流言を飛ばしていた。

防犯達がなに事か相談を始めている中から、日賀が出て来た。

「君が責任を持つなら手錠はやめよう」

「そうでつか、旦那」

防犯達に、真横にびつたりつきそわれた彼らは、西に向つて歩き出す。長屋の人達が左右に開く。だれか横合いから、英一にタオルとチリ紙をす早く渡すのが見られた。

進は、昭鷹の傘に入れてもらつた。

「昭鷹、なんで連れていかれるのやろ？」

「おれも知らんのや？」

家族と長屋の人達に見送られ、西の共同便所の曲り角迄来た時、雪が、縦横と網のように降りしきる間をとほつて、国松の割れがねのような声が聞えて来た。

「われら、逃げたらあかんぞ……」

二

進の家は男五人と、女五人の十人家族であつた。長女の君江は、桑三、二男の繁治は、京都市下京区東七条で家庭を持つていた。三男の勉は、おれは軍隊でめしを食べるのやと云つて、満州国吉林省関東軍独立守備隊へ志願していた。長男の栄吉と、四男の進が一家の中心となつて働いていた。父の八兵衛は、無口な人で、若い頃は一流の靴工であつた。桃色の膚に若い頃流行した入墨が入れられていた。我慢しきれなくなつて途中でやめた入墨と違つて、両腕、両乳、両太モモ

と、完全に仕上っていた。西浜一と自他共に許していた八兵衛の自慢の一つであった。

大正五年、第一次世界大戦後、日本の貿易と生産は躍進して経済の好況がつづいた。その頃、西浜の靴製造問屋（親方）から、ロシヤ靴の製造のため、ロシヤへ出稼の話が持ち上り、腕利きの職人を集めた。支度金として三十円親方から貸し出されることであつた。米が一升十八銭であつたから、貧乏人にしては大金であつた。仕事の条件も良かった。日本靴の一足の賃金が三十銭であつたのに、ロシヤ靴は、一足一円五十銭で問題にならなかつた。

君江、栄吉、繁治と、小さな子供を抱え苦しい生活を送っていた八兵衛は、支度金目あてに飛びついた。八五長屋からも数人の靴職人が参加した。そして、西浜で多数の靴職人が集ると、親方に連れられ、敦賀港からロシヤやウラジオへ向うのであつた。

さて、ロシヤへ渡ってみると、彼らの考へていた甘いことではなかつた。それは、ロシヤ靴は日本の靴とちがつて非常な重労働と、どんな腕利きの職人でも、日一足も出来ないことであつた。それに、体力のない彼らは、頑丈なロシヤ人の靴職人についていけないということであつた。そこへ、開いている瞳まで凍えるような寒さと、酒の好きな八兵衛はロシヤの強い酒をあふった。他国に行った淋しさから女遊びが激しくつづいた。その結果家へ一銭も送金出来なかつた。ロシ

ヤへ渡つた職人達は、皆そんな状態であつた。

家で留守を守る女房のスエは、待てど暮せど送金がなく、小さな子供と、大きな腹を抱えて途方に暮れるのであつた。支度金は、質受けやら借金払いにつかいはたしていた。

男勝りで、靴の出し縫いをきれいに縫って人氣のあつたスエは、近所の職人の下廻り（弟子）などして働いた。それだけの儲けでは親子食べていかれず、借金して家の床几の上で天ぷらを揚げて売ったりして、それでなんとか生活を切りぬけていた。勉が生れた頃、ロシヤへ渡つた若干の職人が瘦せ衰えて逃げて来た。彼らの話では、ロシヤに残る連中は仕事が思うように出来ず、寒さと飢のため死ぬ程困つてゐることであつた。話を聞いておどろいたスエは、八兵衛を日本へ帰すため、借金で首が回らない上に借金して、旅費としてロシヤへ送るのであつた。

十一月、瘦せ衰えた八兵衛は、一銭も持たずしょんぼり八五長屋へ帰つて来た。その頃から彼の体は震え出すようになっていた。原因は、丈夫でない体でロシヤへ渡つたのと、厳しい寒さ、強烈な酒、女遊び、入墨であつた。進が生れ、妹理もつぎつぎと生れて来た。進が小学校二年生の頃であつた。ロシヤ行きでこりていながら、再度のロシヤ行きの募集に、支度金はしさに参加したその結果、八兵衛の体は、完全な中風状態となり仕事が出来なくなつてしまった。長女の君江は、一家の救世主となつて、下関へ芸者に売られていった。

しばらくして、君江から、抱主が客を取れと無理を言われ困っているとの手紙が来た。身売りしたものの娘可愛きで下関へ向ったスエは、どうした手順でか足抜けさせて来た。次ぎは舞鶴へ売られた。そこでも客を取れとせまれ、面会に行ったスエが足抜けさせて来た。次ぎは富山へ売られた。そこも同じで足抜けさせて来た。その度びに抱主が怒鳴り込んできたが、逆に、国松長屋の人達の凄じい剣幕で追い帰され、二度とやって来なかった。それで、君江は玄人にならずにすんだのである。

生活は楽にならず兄達は学校をやめて働きに出た。進も、小学校三年半ばで働きに出ねばならなかった。小さな手押し車でカリント売り、映画館の旗持ちからピラまき、下駄直し屋の小僧などして働いた。それでも生活は楽にならず、父母はたえず喧嘩していた。ある日つかみあいの大喧嘩の後、スエは家出してしまった。国松はじめ、長屋の人達が四方八方手分けして捜し回ったが行方がわからなかった。衆三の弟子となって製申職を習っていた進は、十八才の頃一人前になり家で仕事をするようになっていた。その頃から生活も楽になって来た。進は金を儲けるようになると、新世界、心斎橋へと遊びに行くようになっていた。そこで彼は子供の頃気づかなかった、外部とちがった長屋の生活のみじめさ、遊び先でちよいちよい耳にする差別的な言葉、それで已れにたいしてもある矛盾を抱くようになっていた。それと、西浜の人達が

よく口にする、こっち前（部落意識）にも強い疑問をもち、そのことである古老に聞いて見たことがあった。

古老は、こう言った。

「こっち前言うたら、わいらのことや。同じこっち前でも、京都はな、おんばに山窩が多いけど、西浜のこっち前にはそんな者一人もいやへん。そうやから格式が上や。」

進は、古老の話を聞いて強い衝激を受けた。彼はこの宿命に日夜悩んだ。ただ悩むだけで部落の原因を正しく理解しようとしなかった彼は、部落民であることがすぐ知れる、住所、職業を隠す卑屈な青年になっていた。とはいえ、彼の小さな胸には、線香花火のような抵抗があった。（おれはどんなことがあっても、一般の娘と結婚して見せる）と？

三

防犯室へ通された彼らは、入口を背に首垂れて横に並んだ。防犯の清水が前に腰かけ、煙草に火をつける。日賀は、分厚い書類を積み重ねてある机に、オーバーと帽子を乗せると、横に立ててある竹刀をぎゅっと握りしめて出でくる。ひよいと庭に下りると、彼らを睨みすえながら、オリに入れた熊のように往ったり来たりし始めた。

「貴様ら、博打をしたことがあるだらう。警察をめぐらしたらあかんど。ちゃんと種は上ってるんだ。種は。貴様らが隠れて何をしても警察はすぐ分るんだ。いまの日本の時局をなんと心得ている。——ん——。この非常時に、博打をして良い

か悪いが貴様ら分らんのかッ。貴様ら博打だけと思つたらあかんぞ。心斎橋、新世界で喧嘩したこともあるやろ。それもちゃんと分つてゐんだ。それに、喧嘩の時メリケンを使つた奴がこの中にいる筈だ。それもだれが使つたか、ちゃんと分つてゐんだぞ。どうだ、覚えがあるうが——」日賀は、ヒュンヒュン竹刀で空を斬り、防犯室も割れんばかりに怒鳴りちらした。

凄じい日賀から異状を聞かされた進は、自分の体が消えてしまひはせぬかと思うほど、縮み上つてしまつた。博打も喧嘩もいつのことか思い出せなかつた。奥のはしで立つてゐる八男の態度が、日賀の感にふれた。彼は、貴様と蘭をくいしばつて、竹刀で八男の両耳朶を斬り込むようにして叩いた。八男は、ウ、ウ、ウ、と、かすかに呻くと両手で庇つた。更に、庇つた両手を激しく叩くのであつた。八男の頬はみるみる内に真赤になつた。彼らはますます縮み上るのであつた。前に腰かけていた清水が、投げすてた煙草を踏みしめて出て来た。そして、日賀とちがつて、低いおだやかな調子で言つた。

「お前ら、警察がなにも知らんと思つていたらあかんぞ。正月の二日、昭鷹の家の二階でトランプでカブしたことがあるやろ。警察では、だれが勝つて、だれが負けたことまで知つてゐるや。今晚は警察で泊つてよう考へ、明日の取調べには隠さず正直に白状するんだぞ。そしたら早く家に帰へしてや

る。分つたな」

急に思ひ出せなかつた博打の件が、正月の二日昭鷹の家の二階で聞かされると始めてぼんやりと思ひ出されて来た。そうだ、たしかにこの連中とした覚えがある。それにしても、警察がいま頃になつてそれを知つたか不思議である。

この時入口のガラス障子が開いて、一人の青年が防犯に運ばれて来た。

「貴様もそこに並んで立つておれッ」

左はしに並んだ青年を、右へならへでもするような目つきに眺めた進は、「あッ」と、腹の中で叫んだ。タイワン部落で住む親友の武雄であつた。武雄も正月二日組であつたから。

タイワン部落は、浪速区と西成区の境にあつた。その周囲は細い川に囲まれて、その恰好がちょうど台湾島のような形になつていたので、西浜では栄町六丁目よりタイワンの称号で親しまれてゐた。

日賀が、また往々たり来たりしはじめた。

「貴様らそれでも日本人かッ。精神がたるんでゐるのだ、精神が。警察がそのたるんだ精神を一ぺん叩きなおしてやる。国家のためだッ。分つたッか。こらッ聞いているのかッ」と、竹刀で激しく土間を叩く。

日賀に大喝荒肝を抜かれた彼らは、薄暗い留置場へ送られた。担当に引き渡されると、バンドに申又の紐も取られる。

皆がわきわきしているとは担当の一人が、春雄のわきへ近寄つて来た。

「鉄砲、（春雄の揮名）また来たのか？」

「へえ、旦那、いじめんように頼みませ」

揮名を呼ばれた春雄は、ここでは顔なじみのようであつた。

裸電気がにぶい光を放っている湿っぽい監房に、二人の先輩が跌坐を組んでいた。一人は眼配りの鋭い苦み走った小柄な男。延びたもじやもじやの頭髪は耳をおおい、長い監房生活^{（監房生活）}を物語っていた。もう一人は、どことなく間抜け顔の丸刈の男が座っていた。

監房に来る迄日賀に生気を奪れていた進は、扉の片隅で俯いて立っていたが、やがて静かに正座する。しばらく沈黙がつづく。すると、丸刈がそのままの恰好でいきりよつて来た。

「おい。お前おかしな奴やな。黙ってんと挨拶ぐらいしたらどうや。仁義知らんのか」

と、長い顎をしゃくって言う。

監房が始めての進は、仁義と聞いて飛び上った。

「は、すみまへん……」

「この人が監房長や。挨拶せい」丸刈は、壁に背をつけ微笑している小柄な男を指して、言う。

「森田です。よろしくお願いします」

監房長の貫禄充分の小柄の男は、微笑する頬髭をなで回して、訊く。

「どんな事件でここへ来たのや」

「は、博打らしんです」

「なに、博打らしいて、いま綱下りたのちがうのか？」

「わしら、正月の二日友達の家でトランプでカブしたんです。それが……」

「なんだ。非現行か。それにしても、正月の博打が年越しに上つて来るとは、お前はよっぽど不細工な奴やな。ハ、ハ。それで、いまがやがやとほうり込まれたのか、皆お前の達公^{（友人）}か？」

「そうです」

「何人引つかかった？」

「九人です」

「皆きれいにばくられたのやな」

「はー。」

「ふむー。」

事情を聞いた彼は、腕組みすると首をかしげて呻った。なにを思ったのか丸刈が、小柄な男の方に一膝乗り出した。

「兄貴、この話サツ（警察）にしたら、ちよつとほろすぎるで。ヤエンボとちがうか。おれはそれに間違いないと思うな」

「そうや。非現行で上つてくる事件は、ヤエンボが多いの

や。おれのようにな」

「あの、ヤエンボで、何です？」進は、符牒で解らなかつたが、自分達の博打に関係があるのではないかと思つて訊く。

「ヤエンボ言うたら、サツと腹合わして裏切る奴や……。お前らの博打もヤエンボでなかつたら、正月にした博打がなんでもいまだ分つてくるのや。よう考へて見る……」小柄な男は、進を一直線に見つめて、言う。

「兄貴もヤエンボ師のために売られたのや。……始め難波署で二十九日むされ、芦原署へタライ回して送られて来たのや。兄貴は最後まで頑張つてな、サツ出たらヤエンボ師の奴と勝負をつける腹や。お前も、ヤエンボで間違ひなかつたら、そいつの腰の骨叩き折つてしまへ。……人を売するような奴は、人間の屑だ。……」丸刈が語氣をふるわせて言う。

進は、防犯室から考へつづけていた、警察がなぜ博打のことを詳しく知つてゐるのか、不思議でならなかつたことが、二人によつて誰かの裏切りであると聞かされると、ぶるっと身震ひした。それでは誰が裏切り者か。色々と勘をくつて見たがどうしても解らなかつた。板の間より這いよる底冷えで、彼は体をふるわせるのであつた。

「お前来た時から震えているが豚箱はこめてか？」小柄な男が訊く。

「は。――」

「ハ、ハ。そうか。家は何処や？」

「栄町四丁目です」

「そこ、ここから遠いのか？」

「そう遠いことおまへん。今宮駅の西裏側になるんです」

「なにッ今宮。お前西浜か。……」

「……」西浜を出され、小柄な男より進がびくついた。彼を無言で凝視すると、次の言葉に注目した。

「そうか。お前浜やつたのか。そいつはちつとも知らなんだ。さつきから偉そうなことを言うて辛抱してくれ。おれは浜の者に義理があるのや。トン堀（道頓堀）ですぼつてゐる時によ」

歯切れよく喋り出す話の様子では、彼は与た者らしかつた。浜の者は誰も彼も根性がすわつてゐるとか、浜の者はゴロ（喧嘩）の時はすぐ心が一致して最後迄やりぬぐとか、浜の者のゴロの相手はかたぎでなく、一流のやくざだから偉いとか、浜の者に美男子が多いとか。丸刈も横から口ばしを入れていた。おれは浜の誰と誰がよく知つてゐるとか、浜の者は職人でかたぎなのに、なぜゴロに強いのか、おれはそれがうらやましいとか。

進は、二人に軽く答えるだけで耳を傾けてゐなかつた。家のことを考へていた。いま頃八五長屋は割れ返つてゐるのに違ひない。国松、糸三、近所の人も交じえ額を集めて相談していることであろう。それに、進のいない仕事は出来ない筈で、どうしているだろう。喋りおはつた小柄な男は、にっこり笑つて進に向つた。

「兄弟、監房のことは心配するな。要領はおれに任かしとけ」それから二人は色々と親切にした。小柄な男は煙草を隠して来たかと聞く。進は、始めてのことで持つて来ないと答えた。彼は、煙草の持ち込みの要領を細く教へた。

そして、こう言つた。

「おれ達ヤクザになると、いつ臭いめしを食べぬとも分らぬから、常から担当に見つからん処に隠して持つて歩く。それが監房で引きつがれ煙草に不自由しない」

就寝前担当のつきそいで各部屋順に便所へ行かされた。小柄な男は、寒さに氣をくばつて進を真ん中に寝かせた。

「おれは馴れているが、兄弟は始めてだから、これをまくらにしな」と、片隅にあつた一束の紙を進に渡す。

蚤と虱のしがみつく脂汗臭いべつとりした毛布を引つ被る。進は、神経が痒つて眠れなかつた。手枕の小柄な男は、そもそさせていた。丸刈は、しきりにばりばり掻いている。

菜場のように静まる監房内から咳払い一つ聞えてこなかつた。もう小柄な男と丸刈は、かすかな鼾をかいていた。

降りしきる雪はサラサラと嘆いていた。窓ガラスの縁に雪片が白く留つていた。雪片はガラスに吸いつくと、ずっと消え涙のように流れて行つた。

新しい客の血に飢える蚤と虱どもにおそれ眠れぬ進の心は、正月二日に飛んで行くのであつた。

四

正月一日は快晴に恵まれたが、二日は朝から小雨が降つていた。父は象三の家へ御馳走に招かれ、妹達は、小雨の中でも映画館へ行つた。退屈する栄吉と進が、今宮路切り横の昼店で買つて来た古番音機で流行歌を聞いていると、そこへ、いつもながら頭髪をきちつと七三に分け、トンビの羽根をまくり上げたいきな姿の英一が入つて来た。

「進ちゃん、昭磨の家へ遊びに行かへん。皆寄つてるそうやで」

「よし、いこう」

進も一張羅の大島の着物の上に、トンビを引つける。中折り帽子をあみだに被ると、英一の傘で昭磨の家へ向つた。

小さな靴製造問屋をしている昭磨の家は、稻荷大明神の裏側にあつた。信仰の深い昭磨の父母は毎年のことで、お天氣の良い日より、悪い日にお詣りするのがほんまの信心やと云つて、昭磨の妹を連れて石切神社へお詣りして留守であつた。

二人は、二階へ上つて行き、表側に面した六疊の間の襖をあけると、昭磨、春一、八男、務、秋春達が、トランプ遊びで騒いでいた。二人も交じわつてしばらく遊んだ。トランプ遊びもあいて、軟派の話に早変わりする。女性の話になるとがぜん色めき立つた。

「あんな、女をものにしようと思つたら、お前らのようにガラガラ喋つたら一人も引つかかるものか。おちついて、引き

寄せるだけ引き寄せて、ここと思う時に出るのや一吊奮すると鼻に汗にじませる英一が、言う。

「英一、それ軟派の極意か。ハ、ハ。」務が訊く。

「そうや務、軟派は音なしのかまえていくのや」

「えー、軟派の極意は音なしのかまえか」

ワッハ、ハ、ハ、と、一斉に笑った。

「英一、われ女のこと御託並べているけど、一人でも、ものにした女いるのか」八男が、英一の痛いところをずばりと、言う。

ワッハ、ハ、ハ、と、皆が笑い転げた。

「笑うておれ。お前ら、おれのやっていることちつとも知らんのや。その内にアッと言わたる」鼻の汗をつまむと、苦しき様に言う。

すると、八男が進にはこ先を向けた。

「進、このごろ新世界へちつとも顔を見せへんが、何処かええ巣を見つけたな。白状せい」

その通りである。進は、新世界ではこの連中と遊んだが、心斎橋となつてくると、別の友人と遊びに行った。それに、現在遊びに行つてゐる喫茶店は彼らには喋れなかった。もし喋ればこの連中のことであるから、面白半分によつてくることは間違ひなかった。そしていまのような調子でべらべら喋りまくるであらう。それこそ、こつち前が知れて二度とその店へ遊びに行けなくなる。危い、うっかり喋れない。

「八男、何処も皆同じで、ええとこがない」
進はたくみに逃げると、ほこ先をそらすため秋春に向つた。

「秋春はどうや？」

「おれは女に関係なしや。お前らにまかす。せいだい張り合つてくれ。おれの恋人は玉突や。ハ、ハ、ハ」

この時昭磨が両腕を胸で組んだ。そして天井を見つめて、役者のせりふのように声をしばつて言う。

「おー秋春青年よ。汝は何処へ行く。鈴虫の玉突屋へ」

一斉に笑いがまき起った。

おとなしい春一は、皆の話を聞いてゲラゲラ笑つていた。彼らが軟派の話で騒いでいると、襖がガラリと開いた。

「お前らここにいたのか。だれさがしても居らんはずや。榮吉さんに、ここに集つていと聞いて来たのや」

正月と言うのに、すり切れた様を立て、よれよれの茶色のダブルのオーバーを着た、武雄が喋りながら入つて来たのである。そして八男と務の間へ割り込んだ。

「お前ら、なにを嬉しそうに笑つておるのや？」

「武雄、軟派の話や。英一の音なしのかまえの極意を授つていふとこや」務が、言う。

「軟派の話。これは面白い。ええとこへ来た」

「世帯持ちはあかんぞ」八男が言う。

「そんな水臭いことを言うな。この話は別や」

助平で、口が上手で、面白い武雄が一枚入ると話はずみ、最後に猥談になつてしまつた。話が下へさがつて種がきた時、

「おい、トランプでカブしやへんか。正月やし、小さいので楽しみにするのやつたら、かまへんやろ」入つて来た時から、机に置いてあるトランプに目移つていた武雄が切り出した。

子供の頃からバイとか根っからの勝負好きの彼らは武雄の話に乗つて来た。なかでも昭磨が一番乗り氣になつた。

「やろや。正月のことやし、おれとこの親父ら神様詣りで帰りが遅うなと思うし、それまで大きくならんように、小さいのでやろや」

「おれはするけど、胴元がなんぼで、張り子がなんぼ迄きめてやろ。そうでないとカブはしらんまに大きくなるから」負けずぎらいの八男が、言う。

八男の言つたことに皆がさんせいした。話がきまると昭磨が、階下の押入れから、白いかけ布のついた客用の分厚い座布団を持つて来た。立派な盆が出来る、と、胴元がなんぼ、張り子がなんぼ迄きめにかかつた。

進は、カブは知つていたが、役つきの大事なところが忘れていたので、金を賭ける以上詳しく知つておかないと大変なことになるので、聞いた。

「おれ、カブ忘れているところがあるし、いっぺんあんじよ

う言うてくれ」

「よし、おれが説明してやる」武雄が乗り出す。

ねぎを背負つたカモが思ひのほか多くさん集つていたので張切つた武雄は、オーバをかなぐり捨てると、片膝を立てた。そして、トランプを片手でバサバサと横にくり出しながら、王様と王女をバラバラと落した。王様と王女を掻き寄せると、こいつはカブに関係なしやと言つて、猿の尻のように継の當つたズボンの下に敷く。残つたトランプを馴れた手つきでガサガサとつけた。ボンボンとかるく盆を叩き、さーさーと左右になで、進を見つめトランプをいねいに並べて、言つた。

「親から話すぞ。親の札が一で九が来たら、九一は親のつけ目で総取りや。四の札があつて六が来たら、四六は逃げ場で勝負なしや。同じ札が三ツ揃つたら、揃でカブや。これは親も子も同じや。立てちよい、横ちよいは玄人のすることやめとこ」

ここで一息入れた武雄は、ハートの一を掌に乗せると、勢いよく盆に叩きつけた。

「それから張り子や。これは張ろうと張るまいとお前らの勝手や。肩に一が出よつたら、そやけど、この一はなかなか出ん奴や。もし出よつたら、肩一は嫌質においても張れ言うのや。分つたな進。いま話したのがカブの常識や。おぼえ